第一五〇回鶴見大学図書館貴重書展
小池ゼミ・うるし研究部会共同企画

源氏物語写本をおさめる
本学所蔵二つの蒔絵箪笥

10月13 日（土）～11月21日（水）

展示会場：鶴見大学図書館1階エントランス
時間：平日8：50～21：00
土曜8：50～18：00
日曜閉館ただし、紫雲祭期間中の10月21日（日）は展示のみ催行（10:00～16：30）

会期中の催事

1.記念講演　小池富雄（本学文学部教授）
題目「修復完成記念―本学所蔵二つの源氏書物箪笥の保存修復と分析―」
10月26日（金）　13：00～於図書館地下1階ホール　事前申込不要

2.ギャラリートーク　野口明日香（文学研究科文化財学専攻　博士後期課程）
「桜燕蒔絵源氏物語書物箪笥の保存修復」
10月26日（金）　15：00～15：20

御挨拶

平成 30 年 10 月 13 日
文化財学科　教授
小池富雄

本学において古典籍の収集が豊富であるのは、研究者・専門家からは良く知られています。日本文学科教員と図書館職員を中心に当初は集書がおこなわれ、その後に遅れて設置された他学科の教員も加わりました。また文学部内の附置研究機関として「源氏物語研究所」も開設され、研究と収集が継続されてきました。

平安時代の女流作家・紫式部がつづったとされる「源氏物語」は日本を代表する古典文学であり、主人公の光源氏をめぐる雅な宮廷物語は、巻物形式に絵を加えた「絵巻物」も生まれました。美術工芸品をはじめ、後の謡曲や民俗芸能にまで「源氏物語」は広い影響を与えてきました。

本学の優れた「源氏物語」収集品の中に、54 冊を美麗な蒔絵箪笥に納めた調度手本とも呼ぶべき源氏物語が 2 種類収蔵されています。両者は江戸時代前期の 17 世紀に書写されて、美しい表紙が付けられた冊子形式です。冊子を納める書物箪笥（甲）秋草蒔絵は、秋草の図に銀鋲と螺鈿の夜露が散らされています。（乙）桜燕蒔絵は、優美な枝垂れ桜の花の下に、燕が飛びかう情景が描かれています。内容品の書冊は概ね保存状態が良好でしたが、こちらの箪笥は虫損・汚損が甚だしく、蓋が欠失して身の本体は大破していました。関係者が協議して、保存修復を施しました。直接の施工と契約は漆芸修復家の松本達弥氏に依頼し、分析・監修を小池が担当し、平成 28 年度・29 年度の 2 年間の修復期間を経て見事に姿がよみがえりました。

松本氏の工房と本学 6 号館地下 1 階の保存処理室で施工期間中、箪笥を数回移動させて施工しました。修復の前後には歯学部附属病院にＸ線 CT 撮影を依頼して、破損内部の断層写真を修復施工に活用しました。この間、基礎的なクリーニング作業から高度な修復段階まで文化財学科学部生・大学院生及び海外からのインターンも含めて、多数の学生らが実際の修復を経験する貴重な機会ともなりました。今回の展示披露に際して、内容品の源氏物語冊子についての書誌を、本学名誉教授の髙田信敬先生にご教示いただきました。また追加の展示品として、松柳蒔絵源氏物語書物箪笥とその内容品である源氏物語冊子も展示します。

Ｘ線 CT 撮影については、本学歯学部小林馨教授（口腔顎顔面放射線・画像診断学）のご指導のもと附属病院診療放射線技師大津武士氏に依頼しました。他にも多くの方々にお世話になりました。とりわけ松本達弥氏をはじめ感謝申し上げる次第です。

上記の修復分析は JSPS 科研費 26350379「X 線 CT 撮影はじめ科学的分析を応用した東アジア古漆器の製作技法と保存修復の研究」（研究代表小池富雄）研究基盤（ｃ）の成果の一部です。

解説

2-1 源氏物語（乙　附桜燕蒔絵箪笥）54 冊

紺地に染めた料紙の表紙に、金銀泥絵で源氏物語にちなむ図様をあらわす。中央に金泥粉蒔を施した題箋を貼り、各帖名を記す。製作当初の装丁とみられ、奥書や職語、書写年代などは無く、17 世紀、寛文・延宝年間（1661-81）前後の職業的筆者の書風とみられる。本文は青表紙系統に属する。平成 26 年度購入。【小池富雄】

1-2　源氏物語（甲　附秋草蒔絵箪笥）54 冊

表紙は藍色に染め、金泥・金切箔・野毛・金粉で源氏物語各状に因む図様を描く。中央に装飾された題箋を押し、各帖名を記す。紫絹糸で綴じ込む列帖装で、数帖にわたり錯簡があり伝世の途中で綴じ直されとみられる。奥書・識語などは無く、17 世紀の寛文・延宝年間（1661～81）頃の冷泉流書風とみられる。本文は、青表紙系統に属する。昭和 60 年度購入。（小池富雄）

3-1 源氏物語　（追加展示　附松柳蒔絵箪笥）　52 冊

紺色地に紗綾形・草花を艶摺した表紙。中央上部に貼る金銀泥絵下絵の題箋と本文は別筆で、本文も数人の寄り合い書きにより、いずれも近衛流に学んだ筆跡である。橋姫と椎本の 2 冊を欠失している。江戸時代初期、17 世紀中ごろの写本。平成 17 年度購入。（小池富雄）

2-1 桜燕蒔絵源氏物語書物箪笥

天板と側面には、土坡に生える枝垂桜に飛び交う燕を平蒔絵であらわす。金銀の蒔絵粉を巧みに蒔きわけ、桜の花弁や葉、燕の体躯などの細部を華やかに表現する。燕の喉元は朱漆で強調されている。両短側面には金銅製の吊手金具を打つ。箪笥の蓋は失われているが、桜に燕の華麗な蒔絵が施されていたと考えられる。(野口明日香)

1-1 秋草蒔絵螺鈿源氏物語書物箪笥

天板に吊手金具を備える。倹飩蓋造で、正面上部に錠金具を打つ。蓋と身の四側面に、平蒔絵で「源氏物語」５４帖の各帖題を散らし、薄、撫子、菊などの秋草を描く。秋草には螺鈿と銀鋲の露を施す。平成 23 年度に学内で修理施工された。（野口明日香）

3-2 松柳蒔絵源氏物語書物箪笥

天板に吊手金具を打ち、身の四角には金銅製隅金具を被せる。各面には金平蒔絵で松と柳の立木をあらわす。松の樹幹の一部に絵梨子地をあしらう。松葉の隙間にも梨子地をのぞかせ、華やかな変化をつける。倹飩蓋造とみられる蓋は欠失している。内部は５段、底部に指貫きの穴を開けた抽斗を収める。各抽斗の深さは附属の冊子に合わせて調整したとみられる。（野口明日香）